大津百町瓦版

夏　季　号［No．４０］
２０１９年　　７月

発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636
Email：otsu.machiya@gmail.com

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

逢坂山に関所はあったのか？

逢阪山には上の写真のような「逢坂山関跡」の石碑があることから、有名な箱根の関所や信州・東北にあるような太い格子状の塀で囲まれ、関守の武士が「入鉄炮出女」を厳しく詮議していた・・と思われている方も多いことでしょう。

この逢坂山にある石碑は昭和七年滋賀県により建てられたようですが、大津歴史博物館が発行した「大津　歴史と文化」には「関所とする確証はない」と書かれているそうです。

古代、律令制度により設けられた東国との境に不破、鈴鹿、愛発の三つの関があり、壬申の乱のとき大海人皇子が吉野を出て大友皇子軍の先手を打って不破、鈴鹿の関を抑え戦いを有利に進めたとの話は有名です。この三関は時代を経るとともに場所も機能も変わっていったようです。

逢坂の関も設けられたのは平安遷都以前のことで、何処にあったのかも分からないし、そもそもその時代の関所ははたしてどんなものだったのか？よく分からないそうです。

平安時代は朝廷で天皇や上皇が亡くなったときなど、重大事件が起こる場合に備え、美濃、伊勢、近江の関に兵士を派遣し関を固めたようで、当時の関はいつ兵士が派遣されて来ても良いように、兵器が備えられ管理・維持する関守もいたと言われています。しかし、そのようなことで機能するのはまれで、一般庶民の日常生活に関係の無いものだったようです。

関はなく旅人は自由に往来

江戸時代幕府の道中奉行が作成した『東海道分間絵図』の逢坂峠には、「逢坂関」、とか「関跡」の表記もありません。峠のところには「関の明神」と記されています。「関の明神」は現在東海道沿いに三社ある「関蝉丸神社」のことで、大谷の「蝉丸神社」の様です。昔は「蝉丸大明神」と呼んでいたそうです。

古くから逢坂の関を詠んだ歌は沢山あるのですが、関所そのものことを詠んだ歌が無いのも不思議なことです。

【雨　森】

まちや、まちなみは生活の場

【 昨年電線地中下が完成した京町通り 】

私たちの会は「大津の町家を考える会」と立派な名前を付け二十年以上何となく活動を続けてきました。そろそろ考える会の活動も検証する時期にきているのではと思います。まちなかには高層マンションが林立して、古い町並みを壊しています。数年前までは三百年近く前の絵地図がそのまま使える町でしたのに随分変わりました。１５年程前に学生達が作成した立体俯瞰模型。この模型には残されている町家がこげ茶色で造られています。それを見ただけで町家の破壊が著しいものだと分かるのです。

環濠都市はどう再生したのか？

前号（春季号３９号）で大阪・堺市の「環濠都市北部地区」での町並み保存活動が岐路に立たされていることを書きました。もう少し堺市のまちや、まちなか、まちなみについて見て見ることにします。

地域活動の積み重ね

堺市の北部地域は先の大戦で空襲を免れ、江戸時代初期に形成された「元和の町割」と呼ばれる環濠都市の面影が残されてきました。平成２１年(2009)からこの地元のグループが「七まち家会」を発足させ、堺市景観審議会に要望を出すなど町なみ再生に向けいろんな活動を五年間続けてきて、平成２６年(2014)に「環濠都市北部地区町なみ再生協議会」を設立されたそうです。

同時期堺市は世界遺産登録を目指す百舌鳥古墳群とともに、残されている環濠都市を重点地域に指定した景観計画を立案していました。

発足した町なみ再生協議会(地元)と堺市は議論を積み重ね、広く開かれた場を持ってまちなみガイドラインの作成、堺環濠都市北部地区のまちなみルールの作成に向け両者が一体となって取組みました。

地域で作ったガイドライン

地区内の建物をどうする？修景の基本は？副数回まちなみガイドライン作成分科会を重ねて同地区内で多くの方々に活動と支援制度の創設をめざして北部地域でのアンケートを実施してきました。

アンケートには４３０通の回答を得られ地域住民への意識が高められたそうです。そうしてガイドラインを作成。こうした積極的な活動があって、2015 年には堺市は町並み整備に修景補助金を出すなど具体的支援をしてきました。修景補助制度の実施にあたっては、ガイドラインに沿って行うものを対象として、町なみ再生協議会と堺市が連携しガッツリ組んで宣伝し助成金制度の宣伝と活用をと訴えてきました。

【 修景補助制度活用第１号住宅 】

【 ガイドラインに沿った修景補助制度の活用例 】

堺は町家の博物館

江戸時代前期から戦前まで

2017 年以降、町なみ再生協議会と堺市は協力して連続講座やフォーラムや写真展の開催などを取組んできて、環濠集落を守り再生・存続させる運動は徐々に広がってきたそうです。

無かった高さ規制

ところが昨年、再生途上の同地区内に、１１階建、高さ３３ｍのワンルームマンション建設計画が浮上。

住民と行政が力を合わせ作成した、町なみ再生ガイドラインに“高さ制限”が抜けていたのです。同じく前号でも紹介しましたが、大阪市平野郷地区では地区内にある大念仏寺の大屋根(22m)を基準に条例規制を作成していました。

いま「堺環濠都市北部地区」住民は景観悪化を懸念し、さらなる景観規制を求め「堺環濠北部の町なみを考える会」を結成して、さらなる地区の整備や景観規制を求め議会へ陳情書を提出するなど、いま新たな再生運動が始まっているそうです。

【 地区内の夷さんと波模様の鬼瓦 】

貴重な歴史書『大津町覚』

『大津町覚』のことについては以前この『大津百町瓦版』の表紙に大津市歴史博物館の高橋学芸員に投稿頂きました。その後『萬塾』講座でも高橋さんのお話をお聞きしました。今回改めてその『大津町覚』に目を通して見ますと、江戸時代「大津百町」のまちの様子が良く分かります。たとえば町の中に橋が何処の町にあって石橋か板橋か？その幅と長さ。寺社の数。職人や業種仲間の事。牛馬の荷駄の事。町中の町組の事等々明和年間(1764)～安永二年(1773)頃までの様々なデーターが詰まっています。そのデーターの中身を幾つかをここに拾い上げて見てみました。

○　この「町覚」は、天正年中に坂本城が落城して人家が大津へ引越しして、大津城が築城されたという町の歴史から始められ、関ヶ原の合戦後大津代官による大津支配やその後京都町奉行管轄になったところまで書かれて始まっています。その後の明和年間の時代の様々なデーターが書かれているのです。

大津町数　百町・町名之事

○　現在良く使われている『大津百町』、ここではっきりと大津には町数が百町あって一つ一つの町名が書かれてあり、その町内全体の役家数は三千十五軒もあります。各町は１２軒～１６軒で一つの町組があって各家は諸般の事情によって役務を負担する義務を負っていました。ところが百町の内石川町組にある船頭町と桶屋(棺桶？)町は無役とされ役務を免除されていました。

船頭町は百艘船の重要な役目、桶屋も特別な役目であることから人夫を出さなくても良かったようです。

★　ここに書かれている百町名は、「大津の町家を考える会」が発行・販売している『大津百町おもしろ発見地図』(百町館、曳山展示館で販売¥200)を見てください。

大津のお寺数は・・

○　一　禅宗　二ヶ寺、二　日蓮宗　四ヶ寺、三　天台宗　二ヶ寺、四　浄土宗　廿ヶ寺、五　西本願寺門徒　拾三ヶ寺、六　東本願寺門徒　拾七ヶ寺、七　錦織寺門徒壱ヶ寺、八　仏光寺門徒　三ヶ寺、で合計六十弐ヶ寺とあり、一つ一つの寺院名は記されていませんが、同時代の古絵図にある丸屋町の永順寺、考える会会長宅の泉福寺も当然含まれています。

◎　三井寺はご朱印寺領五千石、境内南北八町余、東西五町余、坊数四十九坊有となって幕府から五千石の給付を受けていた重要なお寺であったことが分かります。

神社は社数・氏子・神事として

○　明神、宮として書かれ、社数、神事(祭)の日や何処の土地にあるかが記録されています。全部は掲載できませんが・・一　四宮大明神、四宮町に有之、神事九月十日、二　新宮大権現、三井寺寺領に有之、神事五月五日、三　三尾大明神、三井寺寺領に有之、神事三月弐番の卯の日なり、他に関清水大明神、関大明神、蝉丸大明神、早尾大明神、平野大明神、黒尾大明神、若宮八幡宮、日置前、神明・愛宕等々拾九ヶ所ありますが、明治以降名前が随分変わっていますし、不明の宮さんも多いです。また、三井寺寺領にある宮が四社あります。

米蔵・米問屋・米・・

○　大津はびわ湖水運を利用した米の大きな集積場でした。そこには大阪の堂島や京都に次ぐ全国でも重要な米会所がありました。米蔵としては幕府の御用米を扱った元大津城跡の御蔵、松平家の加賀蔵、井伊家の彦根蔵は良く知られていますが、大津百町には年貢収集のために蔵屋敷を置いていた大名、旗本、寺社、公家など六十九もの米蔵がありその場所と管理している者の名前がはっきり記されています。

そして米屋数之事として米問屋が七十四軒、米会所は坂本町に有之、米小売屋株は三百拾軒、白米荷合売株は百六拾軒が株を持っていたことが書かれています。

諸仲間数之事

○　百町内にあった様々な業種仲間の事では、米問屋、米仲、高荷問屋、酒屋、百艘、両替屋、醤油屋、質屋、古納屋、新納屋、絞油屋、石灰屋、薪問屋、薪中買、絞草油問屋、魚中買、竹屋、干鰯屋、古手屋、古道具屋、指物屋、屋ねや、取葺やね屋、桶屋、鍛冶屋、畳屋、左官、大工、船大工、木挽、桧物屋、へついや、錦(綿)打屋、麹屋、木屑屋、京通飛脚、京古手屋、大津絵屋以上〆て三拾八仲間、外二　髪結、芝居とあって芝居小屋は土橋町と四ノ宮町の二か所と書いています。

分かり易い業種もありますが、いったい何を扱っているのか分からない業種も幾つかあります。

新納屋＝反物屋、絞油屋＝菜種油屋、干鰯屋＝魚肥料、屋ねや＝瓦屋根と葺、へついや＝竈造屋、業種仲間はそれぞれ株を持っていて勝手に業種仲間には入れなかったそうです。名前は上がっていませんが他にも幾つかの業種はあったようです。

御定賃銭之事・・海道通行駄賃

○　大津から京都、伏見、草津への海道通行運賃がまず京都へ本馬 百六十九文、軽尻百十壱文、人足八十弐文、伏見へ本馬百七十五文、軽尻百十三文、人足八十四文、草津へ本馬百六十六文、軽尻百九文、人足八十壱文、本馬は御用馬で荷物は二十貫まで運べる。
軽尻は駄馬で人を乗せる場合手荷物は五貫目まで。
人足は一人当たりで、たとえば上駕篭は人足六人分が必要。山駕篭は人足四人分が必要でした。これは規定の通行運賃で東海道も中山道も宿場毎に決められていました。

【 明治初めの駕篭旅景色 】

いまではどうして運んだのか？と思われる長持も人足六人分で運ばれていました。

★　百町館に東海道江戸を出て品川宿から大阪・森口宿まで五七次間の諸運賃規定料金が書かれた一覧表を展示しています。

遊郭と旅籠屋のこと

○　馬場町傾城屋の事として、傾城屋と置屋を兼帯している所は七軒。茶屋は拾三軒、傾城数(遊女)は５３人と記されています。
○　大津八町旅籠屋数として百拾軒となっています。この百拾軒のうち二軒が本陣で、大坂屋嘉右衛門と肥前屋九左衛門の名前が書かれています。
★　旅籠屋は大・中・小とあって二食付もあったそうですが個室はなく、殆どは木賃宿で姦しい飯盛り女の客引きはかなり強引だったとの様子は当時の旅日記にも記されています。

牢屋鋪の事　　弐ヶ所の牢と御吟味場も

○　石橋町に弐ヶ所あって東之方と西之方とあり、東之方は三間弐尺半、西之方は一間四尺六寸と東の牢の方が大きかったようです。東と西の間には一間の道幅があったそうです。惣坪数は三百三拾九坪もありました。また御吟味場として東西四間半、南北壱間半の南向瓦葺の建物がり、奥之間は六畳、中之間は四畳半、口之間は弐畳と壱間に半間の土間也となっていました。

歴史を忘れさせない町名

全国で市町村合併が進められ、一体何処にある市なのか？町なのか？分からない市町村があっちこっちに増えています。滋賀県でもたとえば高島市と一括りされましたが、安曇川町、朽木村、新旭町、今津町、マキノ町とそれぞれ特徴ある町村名が消えてしまいました。またそれと同じように市や町で、記号のような町名に変わってしまっています。たとえば大津市中心部でも中央〇丁目〇番〇号、長等〇丁目〇番〇号、隣の膳所学区にも、膳所〇丁目〇番〇号、中庄〇丁目〇番〇号とやはりどこも代わり映えしない町が続いています。

まちづくりに歴史は大事では？

まちを甦らす、活性化するとよく云われますが、まちを語るときそのまちの歴史は大事だと思います。博労町？坂本町？堅田町？平蔵町？船頭町？膳所には坊主町？石神町？伊勢屋町？と旧町名がありました。現在の様な〇丁目〇番地では、昔はどんな町だったのか？振り返る気持ちも湧いてきません。旧町名ならまだ何となく何でこの町名なのか？町名の由来を探り、まちの歴史を振り返って視る事も出てきます。子ども達にも自分たちの地域の歴史も勉強する機会にもなり、分かれば納得も出来るし自分たちの町を大事にしたくなると思うのです。

このお地蔵さんどこ？

祖母に連れられお詣り

【 高観音・近松寺にある豆の子地蔵 】

旧逢坂八町通り近くにある景山刺繍の景山さんは、「六十年ほど前幼児期に、何回か祖母に連れられ山道を登りお地蔵さんに頭からきな粉をかけに行った記憶があるが、一体何処だったか・・？」とお聞きしたので、一体そのお地蔵さんは何処にあるのか訪ね歩きました。どうやらそのお地蔵さんは「豆の子地蔵」と呼ばれ、高観音・近松寺にあることが分かりました。そのお地蔵さんはお堂に入って居られ、何となく黄色ぽく大事にされている様子でいまもきな粉を掛けられているのかなと思いました。

編集後記　会員からの原稿があって作成できれば随分楽なのですが、なかなかそうはいきません。今号は『大津町覚』貴重な歴史書から掲載。これは続編も検討中です。　「Ｋ．Ａ」